

《その他》

流通経済大学スポーツ健康科学部 学生の授業態度・学習意欲についての一考察 —インストラクターの立場から—

大原 奈緒美

A Study of Tuition attitude and learning motivation of
Ryutsu Keizai University Sports and Health Sciences students

—From the standpoint of the instructor—

Naomi OHHARA

キーワード：学部理念，学生の授業態度，学習意欲

1. はじめに

本学スポーツ健康科学部には、インストラクターという役職がある。この役職は、授業サポートを主としており、インストラクター自身が直接授業の指導を行うことはできないが、教員同様、学生に対して身近な立場で各授業のサポートをしている。また、インストラクターは2名おり、それぞれ授業を分担して各サポートについている。

今回、インストラクターの内の1人である筆者が、自分の担当（サポート）する授業（約2年間）の中で見て感じた、学生の授業態度・学習意欲についての一考察を記そうと思う。これは、学生や授業に対する批判や評価ではなく、

あくまでインストラクターの立場からの一考察であり、学部の理念とも照らし合わせて考察していくことで、微力ながら今後の学生の授業態度・学習意欲向上の手立てになればと考える。

2. 本学の理念について

スポーツ健康科学部では、学部の教育目的の下、「スポーツの競技力向上，青少年から高齢者にいたる健康の維持・増進活動，学校教育や社会教育の推進に寄与できる人材の養成」を目指しており、所定の単位を修得し、以下のような知識や能力，態度を身につけた学生の卒業を認定し、学士（スポーツ健康科学）の学位を授与する。

1. 豊かな人間性と社会性を支える広い教養を身につけるとともに、生命教育を中心としたスポーツ健康科学の学問内容および方法を理解している。(知識)
2. 自ら設定した課題について、スポーツ健康科学の学問領域の知識を用いて考察し、自分の考えを口頭表現、文章表現や身体表現によって適確に伝えることができる。(技能)
3. スポーツ健康科学の知を実践の力へと高め、地域社会および国際社会のニーズにこたえることができる。(態度)

また、求められる人間像として「われわれはスポーツを学ぶ事を通じて、人間力に富んだ国際人を育てる」ことを目標とし、この場合の人間力を「自他を認め、自ら考え、自ら行動できる」としている。さらに、あらゆる生命に対して尊崇の念を持つために、「生命の尊厳」を掲げ、これを人間として思いやりの心、強くたくましい精神を持つ事であるとしている。そして、このような人材を育成するための具体的な力は、以下の5つである。

1. 見る力、察知する力 (Vision)
2. 伝える力 (Communication)
3. 決断する力 (Decision Making)
4. 全力を出し切る力 (Commitment)
5. 省みる力 (Self-reflection)

これら全てを含め、スポーツ健康科学部学部長である上野は「全員がライフセーバーになれ。」と、目標を掲げている。体育教師、トレーナーに限らず、生命の尊厳を知り、実践することこそ、一流のスポーツ人に欠かせないと。

だからこそ、一方的なTeachingではなく、学生自ら授業を創りあげるLearningが重要であるとし、以下の3つを教育上の心構えとしている。

1. Teaching (教えて中心) からLearning (学び手中心) へ
2. 教員が学び続ける
3. チームワーク (教員同士／学生同士)

3. 事例

筆者が担当(サポート)している授業を、事例として取り上げ、実際の学生の授業態度や学習意欲について触れていく。しかし、最初に述べたように、学生や授業に対する批判や評価ではなく、あくまでインストラクターの立場からの一考察であり、学部の理念とも照らし合わせて考察していくことをここでの目的とする。

1) 実技科目について

実技科目の履修者は、比較的に下級生(1・2年生)の割合が多く、どの実技科目においても、上級生(特に4年生)の履修者は比較的小さい。また、あらかじめ一人で実技を受けることを避ける為に、履修時の時点で知り合い同士が合わせて授業を履修をしている場合が多い。そのため、授業内での孤立はほばないようである。しかし、授業内での孤立がほばない代わりに、知り合い同士での授業参加によって、授業態度や学習意欲に少なからず影響が出ていると言える。それは、知り合い同士という横の繋がりが強い為、常にそのグループで行動しがちになり、授業時の無駄な私語が増え、集中力が散漫になっている様子がうかがえるからである。

そのことによって、他の生徒とのコミュニケーションが減る、または、必要以上に求めないことから、競争心があまり芽生えずに学習意欲の向上も弱く、悪い意味での一定を保つ状態となる。この傾向は、意外にも男子学生に多く見られ、実技に対して消極的になることから、見る力、察知する力（Vision）、全力を出し切る力（Commitment）の向上に影響する。

2) 必修科目について

必修科目（ゼミを含む）における授業態度や学習意欲は、2極化しているように感じられ、海浜実習を除く講義形式の必修科目については、担当教員の影響が強いと言える。何故なら、講義形式の必修科目は担当教員によって学生の座る位置が異なり、ほとんどの場合、教室の後方（教員から離れた位置）に学生が座る傾向があるからである。これでは、十分なチームワーク（教員同士／学生同士）を図ることができず、Teaching（教えて中心）の展開になりやすくなる。

仮に、強制的に教室の前方に学生を座らせ、チームワーク（教員同士／学生同士）を図ったとしても、スポーツ健康科学概論のようなオムニバス形式の授業に関しては、各担当教員が意識的に授業の進め方を統一しなければ、学生の授業態度や学習意欲にかなりの差が出るのではないだろうか。また、テストがなく主に出席点によって単位が出される必修科目についても、学生の授業態度や学習意欲に大きく差があると言える。

3) 人数が多く簡単な実践を含む講義について

実例を挙げると、「コーチ学・コーチング論」である。

この講義は、履修者人数が130人を超える講義（簡単な実践を含む）であったが、場所はスポーツ健康センターの救命トレーナ実習室であり、講義の際も座椅子は出さずに自由に座らせていたため、学生の授業態度や学習意欲にかなりの差があったと言える。しかし、授業内で使用するワークブックを毎時間、各自にまとめさせた上で、授業終了時に提出させて出席の管理を行ったため、学生の学習意欲は低下せず一定を保つ事が出来た。

また、簡単な実践も多く取り入れ、毎時間の発表を評価の対象にしたことで、学生の授業態度は積極的だったと言える。ただ簡単な実践の際、場所の限界があったため、すべての学生の学習意欲を満たすことは、できなかった。このことは、良く捉えれば目的を達成する5つの力である「見る力、察知する力（Vision）、伝える力（Communication）、決断する力（Decision Making）、全力を出し切る力（Commitment）、省みる力（Self-reflection）」を向上させることにも繋げることができたと思うが、やりきれない結果となった。

4) 学生が指導者（役）として発表する講義について

発表を要する講義の場合、特に4年生が授業全体に与える影響が大きかったと言える。これは、4年生が教育実習や就職活動、大会等での欠席だけではなく、上級生としての授業態度や学習意欲そのものが、下級生や授業全体の雰囲気左右していたためである。一概に、これを断定する事は出来ないのだが、筆者が見てきた限りでは、そのような傾向は強かったと言える。

また、それ以外のケースでも、発表の前後や当日において、授業を休む学生が多く見受けら

れ、そのことによる全体の学習意欲の低下は否めないものとなった。さらに、知識はあるものの発表におけるスキルが乏しいことによって、十分に力を発揮する事ができない場面も多くあった。特に、伝える力 (Communication)、全力を出し切る力 (Commitment)、省みる力 (Self-reflection) は、発表を要する授業において、学生自身が意識すべき点である。

このような発表を要する授業では、伝える力 (Communication) の重要性が高くなるが、担当教員が学生に再三意識させても、学生にとってはそれがなかなか難しいのだということも感じられた。具体的には、伝え方 (表現や言葉) と声の大きさであるが、日頃から伝える力 (Communication) を意識していない場合、急には変えることができない。このことは、コミュニケーション能力にも関わる話であり、スポーツに関わる人間として、スポーツ健康科学部の学生と教員が再認識すべき点ではないだろうか。

5) その他

インストラクターという立場は、学生からすると教員よりも身近に感じるのか、よく「楽な授業はなんですか?」「楽な先生は誰ですか?」「(消極的な意味で) 今日は何をするのですか?」等の質問をされることがよくある。このような質問に対し、積極的な授業参加を促すが、「単位が取ればいい。」といった、授業や単位そのものへの“こだわり”がない返答が実際はかなり多い。その為、「豊かな人間性と社会性を支える広い教養を身につけるとともに、生命教育を中心としたスポーツ健康科学の学問内容および方法を理解している。(知識)、自ら

設定した課題について、スポーツ健康科学の学問領域の知識を用いて考察し、自分の考えを口頭表現、文章表現や身体表現によって適確に伝えることができる。(技能)、スポーツ健康科学の知を実践の力へと高め、地域社会および国際社会のニーズにこたえることができる。(態度)」等の向上には個人差が大きいと言えるのではないだろうか。

4. 今後の課題

個々で学生を見た場合、その人自身が持つ“可能性”は高いように感じるが、その“可能性”を十分に発揮させ、向上させるためには、やはり「Teaching (教え手中心) から Learning (学び手中心) へ」と「チームワーク (教員同士/学生同士)」を徹底して授業の中に取り入れることが必要である。その上で、教員と学生が一緒になって質の向上に“こだわる”必要があると筆者は考える。これは、自ら限界を決めるのではなく、自分の“可能性”に挑戦することを繰り返し行うことで、人間力、さらには目的を実現する5つの力を向上させることに繋がると思うからだ。

しかし、ここで忘れてはならないのが「生命の尊厳」である。この「生命の尊厳」を前提として、教員と学生が日々学び続け、高いレベルでの“質”に“こだわる”ことが、今後の学部全体の授業態度や学習意欲に良い影響を与えるのではないだろうか。

それに対して、インストラクター自身も、教員・学生と一体になり共に学び続ける必要があると言える。